

9 ピエール・フォシャール著『歯科外科医』第2版に見られる歯肉疾患，その2

高山 直秀

がん・感染症センター都立駒込病院小児科

近代歯科医学の父と言われるピエール・フォシャールの唯一の著書『歯科外科医』は、2巻本として1728年に初版が発行され、1746年に改訂第2版が公刊された。本書には、歯科領域における解剖学、疾病総論、各論、治療法、治療薬の処方、手術法、手術器具、義歯など、歯科医学全般にわたる記述がなされている。フォシャールが改良、製作した義歯や手術器具については成書にもしばしば引用されて、よく知られているが、フォシャールが述べた歯肉疾患に関する知見については、歯科医史学分野でもあまり取り上げられていないように思われる。

『歯科外科医』第2版の第2巻には主に手術器具、手術法、義歯について述べられており、歯科領域の疾患、治療法、症例報告は第1巻に記されている。すなわち、第1巻、第16章 歯肉の構造、広がり、周囲との関係およびその働き、第17章 歯肉の諸疾病について 第1に歯肉のありふれたこぶ、およびその治療に適した手術、第18章 エプーリス、すなわち歯肉の表面から突出した肉性のこぶ、およびその治療に適した手術、第19章 パルーリス、すなわち充血、炎症、時には鬱血、漏出、滲出によって歯肉に形成される膿瘍、およびこれを治療するための手術法、第20章 歯肉に生じる潰瘍とその治療に適した手術、第21章 歯の病気に際して歯肉に生じる瘻孔とその治療に適した手術、第22章 壊血病が歯、歯肉、さらに顎骨に及ぼす悪影響とこの病気に起因する障害の治療に適した手術、である。第1章は、歯の構造、位置、周囲との関係および歯の起源と発育と章題が付けられているが、歯肉に注目した記述はみられない。

『歯科外科医』に見られる歯肉疾患の記述のうち、第16章から第21章は、齶蝕に起因する歯肉の炎症性腫脹、膿瘍、瘻孔に関して述べられており、抜歯および切開、排膿、硝酸銀による焼灼などによる治療法が記されているほか、治療に用いる諸器具とその使用法も詳述されている。この部分については、昨年日本歯科医史学会において発表したもので、今回は第22章について報告したい。

第22章でフォシャールは、「私はここで壊血病の広範な細目までも扱おうとするものではない。私の意図はただ単にこの病気が歯、歯肉、歯槽、そしてこれらに隣接する部分に引き続き及ぼす悪影響について、またこれを治療するためのおもな方法について教示することにあるからである」と記述を始め、壊血病は歯肉に種々の障害を生み出し、歯の脱落を招くと、海軍で外科を学んでいた当時に多くの症例を経験したと思われる壊血病による歯肉の病変とその治療法について述べている。ほかに、フォシャールが「さらにもう1種類の壊血病がある」と書き始める歯周病の記載がある。これは『歯科外科医』初版にはみられない。したがって、1719年にフォシャールがパリで開業したあとに治療した患者の中に、以前に多く経験していた壊血病による歯肉疾患とは異なる疾患を発見し、症例を重ねて独立した疾患であることを、初版発行後にフォシャールが確信したものと思われる。